



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	サンスクリット叙事詩『マハーバーラタ』第13巻の文学研究〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	中村, 史
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11621号
Issue Date	2015-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/58777
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Fumi_Nakamura_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：中 村 史

学位論文題名

サンスクリット叙事詩『マハーバーラタ』第13巻の文学研究

論文の構成（目次）

序 章

第1章 『マハーバーラタ』第13巻「教説の巻」「布施の法」の研究

第1節 「教説の巻」「布施の法」の構想と説話

第2節 「教説の巻」「布施の法」の構成と概容 —「布施の法」全章構成表—

第2章 『マハーバーラタ』第13巻第1章「蛇に噛まれて死んだ子供をめぐる対話」の研究

第1節 「蛇に噛まれて死んだ子供をめぐる対話」の考察(1) —運命と行為—

第2節 「蛇に噛まれて死んだ子供をめぐる対話」の考察(2)

第3節 「蛇に噛まれて死んだ子供をめぐる対話」の和訳

第3章 『マハーバーラタ』第13巻第5章「鸚鵡とインドラの対話」の研究

第1節 「鸚鵡とインドラの対話」の考察

第2節 「鸚鵡とインドラの対話」の和訳

第4章 『マハーバーラタ』第13巻第50章・第51章「チャヴァナ仙と魚たち」の研究

第1節 「チャヴァナ仙と魚たち」の考察

第2節 「チャヴァナ仙と魚たち」の和訳

第5章 『マハーバーラタ』第13巻第93章「七仙人の名乗り」の研究

第1節 「七仙人の名乗り」の考察

第2節 「七仙人の名乗り」の和訳

第6章 『マハーバーラタ』第13巻第102章「ガウタマ仙とインドラの対話」の研究

第1節 「ガウタマ仙とインドラの対話」の考察

第2節 「ガウタマ仙とインドラの対話」の和訳

終 章

初出一覧

文献一覧

第1章

「構想と説話」について、各章(adhyāya)が担っている主題、〈枠物語〉(a frame story)と〈枠内物語〉(a story with in a frame story)の主題の整合性という視点から、その特徴が4点(I~IV)に渡って考察される。

I. 『マハーバーラタ』に見る3種類の〈枠物語〉

- (1) 『マハーバーラタ』第1巻「初めの巻」(Ādi-parvan)に見る入れ子式〈杵物語〉
- (2) 『マハーバーラタ』第3巻「森の巻」(Vana-parvan)に見る数珠繋ぎ式〈杵物語〉
- (3) 『マハーバーラタ』第13巻「布施の法」(Dāna-parvan)に見る対話式〈杵物語〉

〈杵物語〉は基本的に「入れ子式」の構造を持つが、実際の〈杵物語〉において物語はいわば「数珠繋ぎ式」に語られることが多い。しかし、「布施の法」の〈杵物語〉が『マハーバーラタ』第3巻中の「聖地巡礼」等の数珠繋ぎ式〈杵物語〉とは異なる点は、「布施の法」の〈杵物語〉において出来事がわずかに起こるのみでストーリーが進行しない点である。

II. 多様なレベルの主題の説話・物語：混在している説話の主題を6種類に分類し、各章の内容を解析。[末尾の()内の数字は章番号]

- (1) 『マハーバーラタ』他巻と共有する主題、『マハーバーラタ』全体に通底する主題 (1, 6-7, 13, 14-18, 102, 104, 109, 111-113, 117-119, 139-149, 148, 158-161, 163-164)
- (2) 『マハーバーラタ』第12巻「寂静の巻」から継続する主題 (1, 32-36, 105, 119)
- (3) 『マハーバーラタ』第12巻から継続する付随的主题 (12, 14, 19-21, 38, 39-43, 44-49, 93, 106-107, 109-110, 114, 116, 123)
- (4) 『マハーバーラタ』第13巻「布施の法」としての中心的主题 (2, 3-5, 8, 9, 10, 22-24, 27-30, 33-36, 37, 50-56, 57, 59-68, 69-74, 76-83, 84-85, 93-96, 98-102, 103, 120-122, 124, 126, 133, 135-138, 151-157)
- (5) 『マハーバーラタ』第13巻「布施の法」としての付随的主题 (23, 26, 84, 87-93, 95-96, 125, 127-128, 165)
- (6) 素材レベルでの主題での〈杵物語〉と〈杵内物語〉の主題の不整合 (5, 68, 70-71, 93-94)

III. 〈杵物語〉と〈杵内物語〉の主題の不整合がある説話として、「鸚鵡とインドラの対話」(第5章)「七仙人の名乗り」(第93章)を取り上げ、素材としての物語の興味ゆえに取り込まれたと考える。両説話は本論文第3章と第5章において和訳研究がなされる。

IV. 『マハーバーラタ』第13巻「布施の法」の章の順序

共通する主題を持つ章の連続、あるいは関連する別の主題を持つ章を挿入しつつ連続する箇所がかなりあることが確認される。各章は主題を複数(主題と副主題)を持つことにより、章の連続性が一旦途切れることもある他、主題以外のモチーフによる連続や、追捕的挿入もある。

これらの分類を通じて、第1章第2節では、「布施の法」全体の構成と概要の一覧表が示される。本表は、従来の内容概観にはない各章の詳細な内容が紹介され、〈杵物語〉と〈杵内物語〉の構造、各章の主題や他章との連続性が俯瞰される。

第2章～第6章・終章

第13巻中の5つの説話を取り上げ、それぞれの考察と和訳を行う。『マハーバーラタ』が本来「口承文芸」「語り物」であって〈杵物語〉の構造を持つ作品であるという観点により、その形式を、「A 口承文芸」「B 語り物」「C 杵物語」に分類し、「C. 杵物語」については「a 原伝承」「b 語りの場と語り手」「c 記録と編纂」の3段階で神話・説話をとらえる。さらに、「x 文学性」「y 教説性あるいは主題性」「z 祝賀性」、あるいは「α 普遍性」「β 独自性」という多角的な視点によって、「布施の法」における神話・説話の文学的評価を試みる。

第2章「蛇に噛まれて死んだ子供をめぐる対話」では『マハーバーラタ』全巻に通底する主題である「運命と行為」について、「C 枠物語」の構造は、〈枠物語〉においては「運命」が、〈枠内物語〉においては「行為」が主題として共存している。

第3章「鸚鵡とインドラの対話」は、「A 口承文芸」としての「a 原伝承」の性格を残し、「B 語り物」となっては「b 語りの場と語り手」についてバラモン向けと、クシャトリヤ向けの2段階の様相があり、「c 記録と編纂」の段階の問題も見られる多面的な性格を持つ例である。

第4章「チャヴァナ仙と魚たち」は、「A 口承文芸」としての「a 原伝承」としての性格をよく残し、ヴェーダ文献以来の神話群が、その伝統を受け継ぎつつ『マハーバーラタ』に至ったかを知らしめている。インドの口承文芸の「β 独自性」を示している可能性のある1例でもある。

第5章「七仙人の名乗り」は、「a 原伝承」が「B 語り物」であった可能性が高く、「A 口承文芸」レベルでも多く語られていたと推測する。吟誦詩人のような語り手によるものとしか考えられない「b 語りの場と語り手」のレベルの事柄について、「C 枠物語」に嵌め込まれたときに生じた摺り合わせと「プーナ批判版」の校訂の問題点を指摘する。さらに、「名前の呪力」における「α 普遍性」とインド的な「β 独自性」を示す。

第6章「ガウタマ仙とインドラの対話」は、「B 語り物」としての性格をよく示している例であり、もともと「A 口承文芸」のレベルのものであったと考える。この神話・説話は「z 祝賀性」が際立っている1例であり、「プーナ批判版」では「聴聞の功德」の部分が削除されていることを指摘する。

いずれの例も古典インド口承文芸の特徴を示すものであり、その解析にあたって、本論文で用いた視点・方法が有効であることを提示する。